氏　　名	宋（そう）　成（せい）徳（とく）

（論文内容の要旨）

本論文は、万葉集の歌の表現がいかに中国文学の影響を受けているかを、第一章「月」、第二章「雁」、第三章「蝉・ひぐらし」、第四章「霧」、第五章「雲」の五つの景物のさまざまな表現についてその詩文の典拠を一一に明らかにし、そして第六章においては、その他のもろもろの素材の表現の詩文受容を考証し、万葉集における中国文学受容の広がりを追おうとするものである。

各章、各節の内容を簡単に要約しておく。

第一章　月を詠む万葉歌と中国文学

第一節　庭を照らす月

巻七・一〇七四番歌「春日山おして照らせるこの月は妹が庭にもさやけくありけり」を始めとして、万葉集には庭を照らす月、庭で見る月、月下の庭を詠んだ歌が三首ある。それらは、庭を照らす月を詠むことの多い漢詩文の受容と考えられる。月を詠む歌で庭を照らす月を詠み、庭で見る月を詠むことは定着してゆく。

第二節　浜月、浦月

万葉集に浦に照る月、浜で見る月を詠んだ歌が二首（巻十七・四〇二九、巻十九・四二〇六）ある。浦、浜を照らす月、浦、浜で月を見ることは漢詩文で多く詠まれる発想であり、それは『懐風藻』にも受容される。中国の詩から日本の詩へ、そして万葉集の歌へと発想が伝えられたものと考えられる。

第三節　露に照る月

万葉集に露を照らす月、月光の下の露が詠まれる。そのような繊細な表現内容は六朝漢詩文の影響と見られる。

第四節　霧の中の月

女流歌人坂上郎女には霧の中の月を見て悲しいと詠んだ歌（巻六・九八二）がある。『玉台新詠』に『詠倡婦』にも霧の中の月を見て寂しい想いをする女性が詠ま

れる。詩文の学問のあった坂上郎女は、詩文に見られる女性の孤閨の想を歌によって表現しようとしたものと推測される。

第五節　寄るよしもなき月

巻七・一三七二番歌は、近寄れない人を月に喩えて詠む。人を月に喩えた歌は多いが、近寄れない月の特徴を詠んだものはない。「明月在雲間、迢迢不可得」と詠んだ、『玉台新詠』の謝霊雲の詩などの詠み方を受容した表現と考えられる。

第六節　国の栄えと月

「靫懸くる伴の男広き大伴に国栄えむと月は照るらし」（巻七・一〇八六）と詠んだ歌がある。自然現象と政治の善し悪しを繋げて考えるのは、中国の籤緯思想に基づく発想であろう。

第二章　万葉集の雁と中国文学

第一節　雁と鶴

万葉集巻十・二一三八番歌は、雁と鶴の取り合わせを詠む。その取り合わせは漢詩文に多く見られる。「鐘鳴詩」の「翩翩孤雁何所栖、依依別鶴半夜鳴」は歌の表現に近い。また、雁と鹿の取り合わせを詠んだ巻十・二一三一、巻十・二一四四番歌も漢詩文の二種類の生き物を詠む対句の影響を受けた可能性がある。一方、歌には漢詩文の孤雁の発想は詠まれない。歌と詩の相違がそこに見られる。

第二節　雁と雨

万葉集には、雨に飛ぶ雁を詠んだ歌（巻八・一五六六）がある。漢詩文にも雨に飛ぶ雁、雨が止んだ後に飛ぶ雁が詠まれる。万葉集で雨とともに詠まれた鳥にはホトトギスもある。これらの歌は、漢詩文の「雨」を詠む作品の影響を受けたものと思われる。ホトトギスの歌が雁の詠み方を応用した例はさらにある。

第三節　雁と露

雁と露の取り合わせは、巻十・二一八一番歌と巻十五・三六九一番の遣新羅使の歌に見られる。漢詩文にも両者は秋の典型的な風物として多く詠まれる。

第四節　雁と月、雁と河

月夜に飛ぶ雁を詠む歌には漢詩文の影響があることは従来にも指摘がある。漢詩文で月を詠む歌で雁を詠むことが定着していること、その詠み方が『懐風藻』にも受けつがれていることを確認することによって、その影響関係をさらに確実に論証することができる。柿本人麻呂歌集の「宇治河作歌二首」（一六九九・一七〇〇）は、雁と河の音を詠む。そのような構成は意識的なものと見られる。その文学意識はやはり漢詩文の影響によるものと考えられる。

第五節　雁と恋、

恋の思いをする時に雁が鳴く、雁の鳴き声を聞いて恋の思いが増すと詠んだ歌（一七〇二、二一三二、三六六五）は、漢詩文の情と景（その中の一つが雁である）を詠む手法を学んだ結果と見られる。雁と秋から冬への季節の推移の中の女性の恋を詠んだのは「寡婦詩」の影響と考えられる。

第六節　雁と物思い

万葉歌人は物思いと悲しい雁の鳴き声を詠む（二一三七）が、雁の声を悲しく聞くのは、『詩経』「鴻雁」に源を発する漢詩文の伝統的な捉え方である。

第三章　万葉集の蝉、ひぐらしの歌と中国文学

第一節　蝉と都の想い

万葉集の歌の本文で蝉が詠まれるのは、蝉の声を聞いて京を思うと詠んだ三六七一番歌のみである。『懐風裳』の漢詩には蝉が非常に多く詠まれている、歌で蝉を詠んだのはその影響と思われる。蝉の声を聞いて京のことを思う内容も漢詩文で確認出来る。

第二節　ひぐらしと晩蝉歌、詠蝉、寄蝉の題

ひぐらしを詠んだ歌に「晩蝉歌」「詠蝉」「寄蝉」などの題詞が見られる。ひぐらしを詠む歌と漢詩文の関わりを論じるには、まず歌と題詞の関係を明らかにしなければならない。

第三節　夏のひぐらしと物思い

ひぐらしと物思いを詠んだ歌（巻八・一四七九、巻十・一九六四）が二首ある。その詠み方は、蝉を詠んだ歌と同じく漢詩文の影響が考えられる。詩に詠む蝉が秋蝉であるのと対照的に、万葉集の歌は必ず夏のひぐらしである。季節感だけは万葉歌人に受容されていない。

第四節　ひぐらしと恋

ひぐらしと恋を詠んだ歌（巻十五・三六二〇、三五八九、巻十・一九八二）が三首見られる。巻十五番歌のように、旅人が蝉の声を聞いて恋の想いをすることを詠んだ漢詩文も見られる。巻十・一九八二番歌は、女性の恋とひぐらしを詠むが、閨情詩にも蝉の声を聞いて恋の思いをする女性が詠まれる。

第五節　ひぐらしと花

万葉集には、ひぐらしと花を詠む歌（巻十七・三九五二、巻二二三一）が二首見られる。漢詩文で蝉は、凋落する秋景の中で詠まれる場合が多いが、花とともに詠まれる例も見られる。『懐風藻』の例も考え合わせると、やはり、詩から歌への影響が考えられよう。

第六節　ひぐらしの鳴き声の鑑賞

ひぐらしの声を「日ごとに聞けど飽かぬ声かも」（巻十・二一五七）と詠んだ歌がある。漢詩文で、秋の代表的な虫の一つとして詠まれる蝉は悲しみ鳴くものと詠まれることが多いので、二一五七番歌は、一見万葉歌人の独特な捉え方のように見られる。しかし、蝉を詠む詠物詩、賦には、蝉の鳴き声を愛でる「声流上林苑」「声美宮商」などのような表現が見られる。そのような側面がひぐらしの歌に受容された可能性がある。

第四章　霧を詠む万葉歌と中国文学

第一章　霧の衣の袖かも

天の川霧立ち上る織女の雲の衣のかへる袖かも（巻十・二〇六三）

霧を袖に喩えることも漢詩文の比喩表現に関わる。特に二〇六三番歌は、漢詩の「雲裾霧裳」の表現に学んだ可能性が高い。

第二節　嘆きの霧

山上憶良は、巻五・七九九番歌で、人の嘆きが霧になると詠む。同じ発想は、巻十五の遣新羅使の歌にも見られる。漢詩文の「嘆息成霧」「嘆息霧興」などの表現と関わりがあると思われる。「この小川霧ぞ結べるたぎちゆく走井の上に言挙げせねども 」（巻七・一一一三）も同じ系統のものと考えられる。人の叫び、嘯きが霧となり、風雲を起こすことで、物事の神秘さ、非凡さを表現することは中国文献に多く見られ、『日本書紀』『古事記』にも活用される。

第三節　霧と雲、露

赤人の歌（巻三・三二四）に「朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは騒く」という表現が見られる。霧と雲の対句は漢詩文にも多く見られる（「夕鴛迷霧中、暁雁苦雲垂」『懐風藻』など）。霧と露の取り合わせは、旅の苦労の表現（人麻呂歌）、人が亡くなることの表現に見られる。旅の苦労、自然界の危さを霧露で表現することが漢詩文に多く見られる。人が亡くなることの表現は、仏典に多く見られる。両者の取り合わせは万葉集以後にはあまり見られず、新古今あたりで再び現れる。万葉集の表現は外来文学の受容が考えられる。

第四節　霧の中の花

春の野に霧立ちわたり降る雪と人の見るまで梅の花散る（巻五・八三九）

多くの注釈書は霧を見立てと解釈するが、実景と読むべきである。霧の中の梅の花を詠むことが歌に受容されたと思われる。霧の中に迷う鴛、霧の中の月が、歌に受容されたことはすでに指摘されている。詩、歌ともに霧と詠まれる雁が多いが、両者の関わりを確定するまでには至らない。

第五節　朝霧の乱るる心

万葉集に、朝霧を「乱るる心」の枕詞と詠む歌（巻十七・四〇〇八）がある。「乱るる」の枕詞を調べると、霧が詠まれるのは特殊であることに気づく。「思慮霧の

ごとく乱る」（『漢書』）や「中心乱るること霧の如し」（「贈周興嗣四首」『呉均集』）などの漢詩文の比喩表現に学んだ枕詞と見られる。

第五章　雲を詠む万葉歌と中国文学

第一節　行き帰る雲

万葉集には雲を行って帰るものと詠んだ歌（四二四二）がある。漢詩文で「帰雲」は非常に多く詠まれる。「天雲の行き帰りなむ」の「天雲の」も、漢詩文の発想に基づく枕詞である。

第二節　別れる雲

歌で雲はまた「別れる」の序詞（巻十・一九二三）としても詠まれる。漢詩文にも、人の別れを雲により表現した例が多い。

第三節　絶える雲

東歌に、人の仲が絶えることを雲で表現した歌が二首（巻十四・三五一七、三三六〇異伝歌）が見られる。漢詩文にも雲の断合で人の離会を表現した例が見られる。

第四節　遠い雲

万葉集に、遠いものを「雲居」など雲と関連させて表現した例が多い。『懐風藻』にも同じ発想が見られ、漢詩文の表現に学んだ可能性が高い。

第五節　飛ぶ雲、雲の波

巻十一・二六七六番歌は、雲を「飛ぶ」と表現する。万葉集で雲を捉える言葉としてやや特殊であり、万葉集以後にも長く使われない。漢詩文では「飛雲」は多く見られる。「雲の波」を詠む歌（巻七・一〇六八）歌も見られるが、その連想も漢詩文でも一般的であり、漢詩文に学ぶ表現と見られる。

第六節　相思の雲

人が亡くなると雲になる、雲を見て人を偲ぶ歌が多く見られる。「巫山の雲」との関わりが指摘にされたことがあるがそれに同調する注釈書は少ない。中国文学の挽歌詩、情詩における「巫山の雲」の受容を具体的に検討すれば、歌と詩との間の

多くの共通点を発見することが出来る。

第六章　万葉歌発想と中国文学

第一節 我が妻の絵

万葉集に「我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我れは見つつ偲はむ」（巻二十・四三二七）と旅に立つ防人が自分の妻を絵に描いて、旅中に偲びたいと詠んだ歌がある。しかし、絵を描いて旅に出るということをそのまま事実として受けとめるよりも、妻に対する愛情の表現と見なすべきであろう。妻を絵に描いて旅で偲んだ前例は『説苑』にあるが、その主人は画工である。その物語が、歌の発想として受容されることを可能にしたのは、それが『藝文類聚』「閨情」に収められていたからであろう。

第二節　雨後の花

万葉集に「我が背子が宿のなでしこ日並べて雨は降れども色も変らず」（巻二十・四四四二）、「ひさかたの雨は降りしくなでしこがいや初花に恋しき我が背 」（巻二十・四四四三）と雨後の花を詠んだ歌がある。万葉集で雨、時雨は花を散らすもの、野山をもみたすもの、自然に変化をもたらすものとして詠まれる。そういう意味で二首の歌は特異である。恐らく漢詩文の「花沾色更紅」「雨罷葉増緑」「沾桃更上紅」のような雨の詠み方の影響であろう。

第三節　染めたる柳

柳を詠む次の歌がある。

浅緑染め懸けたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも　（巻十・一八四七）

漢詩の梁元帝「緑柳」の「露霑疑染緑」に学んだものと考えられる。

第四節　永久なる岩と柏、移ろう花と変わらぬ松

万葉集に、永久なものとして岩と柏を挙げる歌、花と松を対照的に詠む歌が見られる。これに通じる表現は漢詩文に多く見られる。

第五節　茅渟壮士に寄りし枝

「墓の上の木の枝靡けり聞きしごと茅渟壮士にし寄りにけらしも 」（巻九・一八一一）の表現と『玉台新詠』「為焦中卿妻作」との関わりは早くから指摘されてきた。恐らくそうであろうと思われるが、両者の間にはまだ開きがある。漢詩文に見られる、人が死んだ後、墓に生える木の枝が思う方向に靡くという「東平之樹」なども典拠になっているのではないだろうか。

第六節　寒き八重衣

八重衣を重ねても尚お寒いと詠むことは、万葉集で極寒の表現（憶良八九二番歌）と独り寝の寂しさの表現（四三五一番歌）に使われた。漢詩文にも「獨眠真自難、重衾猶覺寒」など独り寝の寂しさを表現した例と、単純に寒さを表現した例と、ともに見られる。

第七節　散る玉

巻九に「泉川の辺にして間人宿禰が作る歌二首」（一六八五、一六八六）がある。共に川の水を玉が散り乱れると詠む。「海賦」の「揚珠起玉」に学んだ可能性がある。

第八節　月夜も闇に見ゆ

万葉集に、照る月日が闇に見えると詠む歌が幾つかある。現実にはあり得ないこのような表現は、漢詩文の挽歌詩に学んだ可能性が高い。

氏　　名	宋（そう）　成（せい）徳（とく）

（論文審査の結果の要旨）

萬葉集は、その歌はすべて漢字によって表記され、歌の題詞、左注は漢文で記され、しかも漢詩文の作品、漢文の手紙などをも少数ながら含む一大総集である。古代日本におけるいわば文明開化期の作品であり、当然ながら、先行する中国文明のきわめて強い影響下にある。近代日本の文学が西洋文学の色に染められたよりも更に深刻な漢詩文の影響が、その歌の発想、表現のほとんどすべてにわたって見いだせるのである。しかし、それにもかかわらず、その影響何如の探究は、萬葉研究史上もっとも注目されることの少ない分野であった。たとえば賀茂真淵の萬葉考が集中の漢文や漢詩に一切注釈を加えない態度に明らかに見られるような、「からごころ」を排した上で「やまとごころ」を求めんとする国学的な姿勢が、その最も大きな原因であったと言えよう。

もちろん、萬葉集における漢詩文受容の研究は、その従来の欠を補うべく、近年になってにわかに盛んに成りつつある。本論文もその流れに棹さし、萬葉集の歌のいちいちに漢詩文の影響を見いだそうとするものである。

全体は六つの論文から構成される。第一章が「月を詠む万葉歌と中国文学」と題され、以下、「雁」「蝉（ひぐらし）」「霧」「雲」、そしてその他を扱う第六章と、萬葉歌が漢詩文の影響を多様に蒙ったさまを、その題材ごとに網羅的に明らかにするものである。各章、それぞれに数多くの歌を取り上げる。そのいくつかの例を示しておきたい。たとえば第一章では、「靫懸くる伴の男広き大伴に国栄えむと月は照るらし」（一〇八六）という月の歌をあげて、月を詠む数多い萬葉歌のなかでも、月が照ることを国の繁栄の兆しとする発想は他にはまったく見られないことを指摘した上で、これを「政太平なれば則ち月円かにして輝多く、政升平なれば則ち月清くして明かなり」（「禮斗威儀」『藝文類聚』月）というような漢語表現に関連する可能性を指摘する。

また、蝉の歌を論じる第三章では「石走る瀧もとどろに鳴く蝉の声をし聞けば都し思ほゆ」（三六一七）を取り上げて、萬葉では「ひぐらし」の語が詠まれることが多い中で「せみ」の用例はこれだけであり、しかもその声を瀧音に譬える表現が珍しいことに注意した上で、「危湍和して似ず、細管学びて成り難し」（陸羽「渓館聴蝉聯句」）のような、蝉の声を楽器の音や水音に譬えることの多い詩文の発想がこの歌の背景にあったことを推測し、さらには、「都し思ほゆ」と詠われるその望郷の情が、都を離れた旅人の詩に蝉声の表現の多いことに関わる可能性を指摘する。

他にも、「朝霧の乱るる心」（四〇〇八）が「思慮霧のごとく乱る」（『漢書』）や「中心乱るること霧の如し」（「贈周興嗣四首」『呉均集』）などに、また「浅緑染め懸けたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも」（一八四七）が、梁元帝「緑柳詩」の「露霑ほして緑に染むるかと疑ふ」などに由来する可能性をそれぞれに指摘する。

指摘された影響関係は、従来の注釈書ではまったく注意されなかったものばかりであり、萬葉研究者に大きな衝撃をもって迎えられるはずの発見である。かくも濃厚な漢詩文の影響下にあるものという予想のもとに、萬葉集は読み直されなければならない。本論文はそれを確実に実証した研究として、高く評価されるであろう。

しかし、各素材ごとに網羅的に漢詩文の影響を説く本論文であるが、その中には、何となく似たところがあるという程度の例も少ないとは言えない。譬えて言えば、璞と石の山に分け入って、石を捨てて、璞を取り玉に磨き上げるようなことが、今後の論者の仕事とされなければならない。影響関係を論ずる場合、むしろ似ていない点にこそ冷静な目を向ける必要があろう。類似が受容を意味するのか、人の心の普遍を意味するのか、いちいちに吟味することも必要であろう。受容があれば変容もある。その変容を手がかりに漢詩文と萬葉歌のそれぞれの個性を探ることは、本論文の一部ですでに成功を得ているが、それを更に広く試みてもらいたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十一年一月二十一日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。